



スジグロシロチョウが飛ぶころ

小島きみ子

「この地上の事物は私たちの内部で目に見えないものとなるほかにその逃げ道を持つていません。私たち人間は自らの本性の一部を通して、目に見えないものの世界とつながりを持っています。（ライナー・マリア・リルケ 1925年11月13日フレイイチ宛 高安国世訳）

《白妙の衣干すてふ 天の香具山》とは天皇が国見をする山であり天に近い、もしくは天から降りてくる聖なる山であった。春の神事を済ませた人々が儀式に用いた衣を干しているという歌である。

《春過ぎて夏来にけらし》の頃に飛ぶ白い蝶がいる。田植え蝶といわれているスジグロシロチョウである。水路を上って行く台地を歩いているふたりの幼子が見える。近くに両親が働いている田圃があるのだろう。麦わら帽子に、白いブラウスと紺のモンペ、白シャツに風色のズボンを着て袖口が汚れないように手つ甲をした男と女が、田植え綱を張りながら田植えをしている。山菜黄の木の下には未だ首の据わらない乳飲み子が籠のなかに寝かされている。私が生まれた土地によりやく通り着いたのだ。見知らぬ少年と手を繋いで走る。物干し竿に父の白シャツと母の手拭いが干してある。田植えが終わったのだ。どこの家の物干し竿も父母の白い衣服が干されている。スジグロシロチョウが飛んでいる。



バス（5）

池田 康

回送バスは真つ暗
客は誰一人乗つていず
運転手もいない
ヘッドライトだけつけて
闇をゆく
闇から闇へ
どこまでもゆくのだろう
生を死へと運び
無を有へと運び
黒いワゴン
zzz
月を見ていた
窓のすゝ向こうに全月の月があった
月はどこまでもついてきた
やがて道が曲がると
月は見えなくなつた
薄情な月はどこかへ行つた
月が戻つてきた
ウインクしただけさ
とも言わずに
zzz
眠りから醒めて窓の外を眺めると
白っぽい野原が一面に広がり
それ以外はない
あれは白話草
少女ガイドが言う
白話草で覆われた地球はもつとも平坦な地球です
白話草で覆われた大地はもつとも安適な大地です
ぼくはそれを無条件に信じてしまふ
そしてあの白い野原に寝転びたいと思ふ
白話草が紡ぐ夢はただよう雲
白話草がうたう子守唄はMとNのヴォカリーズ
白話草が眠る昼は牛と馬と羊のふるさと
白話草がささやく噂話は太古の風の紀行
白話草につつまれる至福は
あまりにも静かだ
忘れてしまふ
何もかも
zzz
バス停で待つ人を想う
到着時刻の書いてないバス停
待つ人のために

橋の手前

久野雅幸

わたつてはいけない橋が
ここにもある
深い底を流れることとなつた川の
こちらとあちらとをつなぐ
木づくりの古い橋
何度かの氾濫を経てより深く降ろされていったのだろう
歴史の底を
流れながら 川は いま
透明な水の中に長い藻をなびかせ
小さな魚の群れを泳がせている
こちらの橋の入り口とあちらの橋の入り口とに
金属製の柵が設けられ
取り付けられた看板に示されている
——通行禁止

こちら側は
山すそから広がる田畑を通う道のはて
あちら側は
二つの大きな駐車場にはさまれた道が
国道に横切られ 絶えている
もとは きつと
山すそに開かれた村と城下を開かれた町とをつなぐ
一本の道だつたのだろう

夕方になれば
かつては追う者もあつたにちがいない
ほたるのようも
あちらにも こちらにも
ぼつりぼつりと灯りがとまる
あつちの みずは にかいぞ
こつちの みずは あまいぞ

わらべうたの中にも
あちらと こちら が
さりげなく入りこんでいる
立ち位置をもつかぎり
のがれられない形式が
ここに ある

いまも（と言つてまちがいでないだろう）
あちら側の灯りはにぎやかで
こちら側の灯りはしずかだ
寒い

バスは救世主として来るのだろう
ぼんこつ乗合自動車を
救世主に変える
物語がある？
バスは待つ人の想念の中を走る
待つ人の「待つ」がバスを走らせる

zzz
バスは道のない荒野を疾走している
いまにもバンクしそうだ
道なき世のバスは大愛なのだ
でたために走る快楽を享受できるのは
偽善的にやさしい平原の上だけ
怒りに満ちた荒野では
立ち往生し
脱輪し
エンストし
襲撃される
くず鉄になる
zzz
鉛筆がニュースとなるとき
バスは尖つた耳を立てる
道が崖と化すとき
バスはバックミラーでぶら下がる
星が白夜になるとき
バスは闇を懐胎する
白話草が黒話草になるとき
バスは絶望をガソリンとする
餓鬼が飢餓になるとき
バスは砂埃を食べる
キノコが雲になるとき
バスは空へ落ちる
風がガスに変わるとき
バスは淵へ沈む
zzz

バスは宇宙という荒野をゆく
バンクして賽の河原に臨時停車する
冥途の飛脚が父の父のふるさとの手紙を届ける
彗星が衝突して激しくスピンする
夢が衝突してサイケな異次元に押し出される
ベンがために描いた道をたどる
目的地から遠ざかるのはバスの美德
暗闇の獣道だつて走り
手をあげる乗客があれば停まる
どんな怪獣も拒否しない

わたしの場合
寒さはまず心臓に来て
それから 体じゅうに広がっていく
もとより ここは
長く立ち止まっているのにふさわしい場所ではない
人がわたらない橋でも
橋をわたつて来るものがあり
橋をわたつて行くものがある
いまはむこうから吹いてくる
風のほかに
わたつてはいけない橋が
ここにもある



バスは「実在」の崖から
ありやなしやの谷へと転げ
ありえる過去
ありえない未来
あらまほしい可能性
縁起でもない不可能性へと落ちてゆく
めまひはバスの回転
よろめきはバスの酩酊
錐探みして
絶望の警笛を鳴らして落ちてゆく
夢という片恋に落ちてゆく
菱形になつて
ひょうたんになつて
雪片になつて
花片になつて
能舞台になつて
タイムマシンになつて
深すぎる眠りへ落ちてゆく
zzz

